

「社会の発見」再考

—福田徳三と左右田喜一郎—

猪 原 透*

はじめに

近年、歴史学を含む社会科学において「社会」への関心は高まりつつある。その意味とは、第一に、国家／社会という二分法を前提にした従来の社会理論への反省であり、第二に、国家による介入と再配分を生み出す「社会的なもの」を軸とした社会理論の再構築への志向であると言えよう。

歴史学において以上のような傾向を象徴しているのが、飯田泰三を嚆矢とする¹⁾、大正期における知識人階級を対象とした「社会の発見」論である。飯田以降にも多くの研究者によって「社会の発見」が取り上げられ、その中でそれぞれの知識人が「社会」という言葉にどのような意味を込めていたかについては、かなりの程度明らかにされており²⁾、本研究もまたこれらの先行研究に多くを依拠している。その一方で、研究の進展とともに「社会」定義の多様性が強調され、「社会の発見」を全体的な知の構造変動として捉える当初の問題意識はかえって弱くなったように思われる³⁾。

しかし、決定的に重要なことは、時代や立場によって概念の表す意味が異なるということではなく、多様な経験が概念によって結び付けられ、主体によって利用可能な現実が形成される、その方法が時代によって異なるということ、つまり概念の機能こそが問題なのだ。このような問いを欠いたとき、「社会の発見」論は「社会」認識の相対性を説きながら、「社会」そのものに

* 立命館大学大学院文学研究科博士前期課程

についてはアプリアリな客観的実在とみなすことになり、結局はその相対性、別の言い方をすれば歴史的な偶有性を表面的にしか捉えていないことになる。

以上の点を踏まえたうえで、本研究の目的について述べておこう。本研究では、これまで個々の思想家の検討を中心に進められてきた「社会の発見」論を、社会概念の機能的変化という視点から再検討を行う。それによって、現代の研究者が無自覚なまま前提としている「社会」を、固有の歴史をもったものとして議論の対象とすることを目的とする。具体的には、まず第1章において「社会問題」から「社会貧」への転換という視点から知の構造変動についての概略を述べたあと、第2章以下では左右田喜一郎と福田徳三という2人の経済学者の理論を検討する。

第2章で取り上げる左右田喜一郎については、これまでも新カント派哲学の導入者として、「西田哲学」の命名者として、あるいは日本における経済哲学の創始者として、外来思想の模倣にとどまらない独自の思想を展開した哲学者として高く評価されてきた⁴⁾。その一方で「現実の矛盾的諸契機を捨象したその図式性」がしばしば指摘され⁵⁾、哲学史的な文脈を除いて、彼の言動が社会思想史の対象として本格的に検討されることはほとんどなかった。

たしかに左右田の著作を読む限りでは、そもそも寡作な人物ではあるにしても、同時代の経済的・社会的動向への言及はごく少数であり、そこから直接的に大正期の社会のあり方を読み取ることはできない。しかし一方で、20世紀初頭の日本が「大衆化」という西洋世界一般に見られる現象に巻き込まれていくことで、「国家の独立」を至上目的に掲げていた社会諸科学がその説得力を失う中、新しい社会状況に呼応するような「社会の学」を編成し始めた先駆的人物としてみるならば、彼の言動は大正期の知識人が語る「社会思想」のいわば基底的部分を構成していると言えよう。とくに1910年代の左右田は、社会政策学会の第二世代を代表する気鋭の経済学者として、また黎

明会のイデオログのひとりとして、その社会的な知名度、影響力はきわめて大きかった。

その主著『貨幣と価値』については、左右田哲学の出発点として以前から言及されてきた。たとえば経済学者の橋本努は、本書を以下のように位置づけている。

おそらく左右田は、実業界における自身の役割、すなわち左右田銀行の後継としての役割から、ほかの学者にはない使命感とビジョンを当初から抱いていたのであろう。……〔本書において左右田は〕当時の貨幣社会のあるべき方向性と任務を的確に見極めることに成功したと言える⁶⁾。

すなわち橋本は、本書の主題を貨幣がその実体価値から遊離し、不換紙幣へと発展していく歴史的必然性を描き出すことにあるとしている。左右田の貨幣理論において貨幣の価値は、諸個人を離れた「評価社会」によって担保されており、貨幣の発展と評価社会の発展は相即的なものとされている。橋本はこの評価社会を「鑑定団や中央銀行のような集団」になぞらえており⁷⁾、銀行家である左右田がそこに自らの任務を見出したのだ、という。

しかし、左右田の関心が狭義の経済にのみ向けられていたと考えるべきではないだろう。後述するように、左右田哲学はその出発点において既に、経済学を社会科学の一分野として、広義の「社会」との関わりによって把握しようとする志向を強く持っていた。このことは、「文化主義」を掲げて黎明会へ参加するなど、社会政策的な関心が前面に表れる後の時期との連続性を考える上で重要である。このことから、左右田の言動が同時代の社会言説のなかで具体的にどのような位置を占めているのか、改めて問う必要があるだろう。

左右田哲学に一貫しているのは、社会を、それ自体としては存在しないものを中心に把握するという方法である。社会とは差異そのものであり、確か

に存在しているが、これと指し示すことはできない。何らかの偶然によってそれが具体化したとしても、差異そのものである社会とは一致せず、そこにはイデオロギー的な作為が存在している。ゆえに、社会は「無限の課題」でなければならない。

だが、このような社会の構想的性格は、社会政策的な関心を持つものにとって肯定的に捉えうるものである。それは社会が、現在の社会とは別のものでもありうる、という可能性を示しているからだ。第3章では左右田の指導教官であり論争の相手でもあった福田徳三を取り上げ、「社会」に関する学問的言説がいかなる形で編成されていったのかを見ていきたい。

第1章 「社会問題」から「社会貧」へ

近代日本において「社会」が何であったのか、あるいは何でなかったのか。この問いに答えることは、それが原理的な問いであるが故に、きわめて難しい。ただ、まったく先行研究が存在しないわけではない。たとえば、石田雄によると、それは「社会問題」のことであった。

すなわち、なお明治後期においては、一度出来上がった市民社会の内部対立あるいは矛盾から「社会問題」が発生したというよりは、「社会」そのものが、元来「問題的」なものとして成立したとみるべきであろう。「社会問題」という語がポピュラーになったのは一八九六年(明治二九年)頃からといわれるが、まさにこの頃から「社会」が問題的なものとして識者の注意をひくに至る⁸⁾。

石田の主張を要約してみよう。societyの翻訳語として現れた「社会」は、1896年前後から原語には無い日本語独自の意味を持つようになる。すなわち、急速な近代国家化を進める日本にとっての余剰的な領域という意味である。

総合雑誌『太陽』に置かれた「社会」欄は、政治、法律、文学、商業等の各欄に当てはまらない事柄を報道するためのものであった。また、1897年には社会政策学会が設立され、99年には横山源之助の『日本之下層社会』が刊行されるなど、「社会」は日本の歪んだ発展の病理、すなわち「社会の乱調」において意識に上ったのである⁹⁾。

重要な指摘である。とはいえ、社会そのものが問題的なものである、と言えるにしても、「問題」とはいかなる意味で「問題」であったのか。石田の議論では、社会政策の対象として「社会」が見出される、あるいは問題的な「社会」の意識化によって社会政策が組織化される過程を追うことに重点が置かれている。つまり、本来ならば国家に包摂されるべきであるにもかかわらず、現にそうになっていないことが「問題」なのだ。しかし、この見方は「社会」把握の特質を十分に捉えられていないように思われる。その根拠として、石田も簡単に触れている「社会小説」の用例を見てみよう。

石田が「社会問題」の画期として挙げた1896年に、雑誌『国民之友』に「社会小説出版予告」が掲載され、それをきっかけとして「社会小説論争」と呼ばれる論争が起こっている。この論争については、議論が盛んに行われた割には、実作では内田魯庵『くれの廿八日』が知られている程度であり、「社会小説」それ自体も政治小説・社会小説・社会主義小説と続く明治の傾向文学の一環であり、文学的には傍流にすぎないと一般的には評価されているが¹⁰⁾、ただ、論争のなかで社会小説の重要性を強調した主な論者（内田魯庵、宮崎湖処子）のいずれもが社会問題に強い関心をもち、また実作の題材としてもそれを取り上げていたことは見逃せないだろう¹¹⁾。

ただし、「社会」という言葉が明治初年から存在していたのと同様に、社会小説という言葉もまた、この論争以前から存在していたことに注意する必要がある。山田博光によると、社会小説という言葉の初出は、1886年に書かれた高田早苗（半峰）の『当世書生気質の批評』であるが、このなかで高田は『当世書生気質』を指して、最も典型的な社会小説としている。つまり、

社会小説とは身近な出来事を材料とした、一種の写実小説のことであり、少なくとも1892年ごろまで高田と同じ用法で使われていたという¹²⁾。そして、社会小説論争を経たあとでも、この点については同様であった。飛鳥井雅道が「〔内田〕魯庵・〔広津〕柳浪・〔徳富〕蘆花によって描かれ、打倒目標となったのは、日本の封建的な「家」であった。また「家」や「迷信」を支える「社会」であった」と述べているように¹³⁾、社会小説作家たちは「社会問題」を「家」や「迷信」といった経験的な対象と切り離して考えたわけではなかったのである。

たとえば、同時代において金子筑水は、社会小説が取り扱う対象を次のように定めている。

- (一) 近世の社会主義に関する事想を書けるもの
- (二) 社会の個人に関する関係を書けるもの
- (三) 漠然謂う小社会に関する事想を書けるもの
- (四) 全体としての社会の行動を書けるもの¹⁴⁾

きわめて広範囲に渡っているが、金子は次のように限定することを忘れていない。「小社会」とは「全分としての社会を組織するに主要なる団体」のことであり、「全体としての社会の行動」とは「全分の大社会の大活動」のことである。しかし、後者については「斯く無量の意義を含める大社会を、小説の舞台となさんは容易の業にあらず、むしろ不可能の事柄として排斥せられんに似たり……社会小説の極地として、天才の現はるゝを俟つ」と¹⁵⁾、その不可能性が強調されている。社会小説における「社会」は、自己の外部に広がりながら、実質的に文学者の感受性の及ぶ範囲に限定されているのだ。

複数の論者が述べているように、1896年以降、社会小説論争とは別の場所においても「社会」の意識化が始まったことは確かであろう。江藤淳は高浜虚子の『回礼雑記』を取り上げ、「虚子がこのとき「社会という感じ」を問

題にしはじめ」たことを¹⁶⁾、高橋敏夫は国木田独歩の『武蔵野』を取り上げ、独歩が「社会」を「同時代の矛盾・葛藤・分裂・差異・闘争等を捉える言葉として」用いたことを¹⁷⁾、それぞれ指摘している。しかし、ここで用いられている「社会」は「社会という感じ」のことであり、経験的対象を指し示しながら、一義的に使われているわけではない。江藤は虚子における「社会」を「他者の感触といってもいいものである」と述べているが¹⁸⁾、正確な指摘であると言えるだろう。日常的世界の亀裂として現れた「社会」は、文学者の感受性によって捉えられる「他者の感触」であるに留まり、文学者の属する日常的世界そのものを拡張するような存在として描かれることはなかったのである¹⁹⁾。

「社会」が経験的対象を越えたふくらみを持つ存在として認識されるようになるのは、少数の先例を除けば大正以降のことである。それを象徴的に表しているのが、「社会問題」という言葉の意味の変化であろう。

たとえば、明治期に優生学者として出発し、大正期に社会事業学者へと転身を遂げた海野幸徳は、1924年の著作のなかで次のように述べている。

現代は社会化が普遍的に一切を着色し、一切を社会問題化する時代で、社会運動は即ち現代人労力の中心と云ふ形²⁰⁾。

大正期においては、もはや、一部貧民に対する「慈恵的救貧事業」や「労働と資本の調和」にとどまらず、児童問題、住宅問題、部落問題、衛生問題、婦人問題などあらゆる領域へと「社会問題」の対象が拡大していた。そして、それは単なる対象の拡大ではなく、問題の所在が、個々の貧困や労資対立ではなく、むしろそれらに先立って存在する「社会」に求められるようになった。それは「社会貧」の発見であったと言える。

今や時代は変遷して、社会対象の社会貧なるものを見るに至った。この

社会貧に対しては、是非とも世人一般に対し、社会連帯責任の観念を喚起せねばならぬのである²¹⁾。

明治期においては、具体的な事件、団体、出来事、あるいは貧困、不道德などの問題があり、それらを指す言葉として「社会」という言葉が使われた。それに対して大正期では、まず「社会」という存在あるいは「社会化」という現象がある。そして、それが原因となって個々の貧困、不道德が生み出されるのである。

しかし、このことは「社会」が明確に定義され、その全体像が見通せるようになったことを意味しているわけではない。むしろ逆である。たとえば、内務省社会局の初代局長として社会事業の制度化を推し進めた田子一民は以下のように述べている。

社会事業なる観念は極めて不明瞭な観念である。第一に「社会」と云ふ文字は不明瞭な文字で、学者もよくこの言葉を用ゐるが、実は甚だ明瞭ではない。……しかし、社会なる文字は、各個人を団体的に、社会的に結合する上に於て、各個人を社会的に自覚せしめる点に於ては頗る効果の多い文字である²²⁾。

一見して明らかなのは、田子の議論の転倒性である。「社会」が何であるかは不明である。しかし、それにも関わらず人々を「社会的に結合」し「社会的に自覚」させることができる。田子はそう述べているのだ。

「社会の発見」に関する先行研究が明らかにしているように、大正期以降においても「社会」の定義は多様であった。1930年に出版された『社会科学大辞典』においても「社会の本質及び概念に関する学説は、東西何れも区々であつて、殆どその一致を見ない有様である」と書かれているように²³⁾、定義の多様性はむしろ議論の前提とされるべきものである。より重要なことは、

田子の議論が示唆しているように、それにも関わらず「社会」は存在している、ということであり、それは「社会的結合」や「社会的自覚」に先立っている、ということである。

このような「社会」概念の変化は、どのようにして当時の社会学者たちに受け止められ、彼らの学問的言説を編成していったのか。まずは左右田喜一郎の議論を見てみよう。

第2章 左右田喜一郎における社会科学の基礎付け作業

(1) 左右田哲学と社会科学

まずは左右田喜一郎の略歴について述べておこう。彼は1881年、横浜の銀行家である左右田金作の長男として生まれている。東京高等商業学校では先述した福田徳三に師事、1904年に同校を卒業したあとはイギリスのケンブリッジ大学に留学、翌年にはドイツのフライブルグ大学に転学、のちチュービンゲン大学に移り、当時のドイツ哲学界で広範な影響力をもっていた新カント学派の哲学を学んだ。その後、フランスを經由して1913年に帰国している。帰国後まもなく父・金作の死去により左右田銀行の頭取に就任することとなるが、その一方で東京商科大学、京都帝国大学文学部の講師となり、杉村廣蔵、本田謙三らの経済哲学者を育てた。また、横浜社会問題研究所を主宰して『社会問題研究叢書』を監修。1925年には貴族院議員にも就任している。しかし、関東大震災後の金融恐慌の影響により、左右田銀行は閉行。その心労のためか体調を崩した左右田は、1927年に一切の公職から退き療養に努めるが、同年死去している²⁴⁾。

日本哲学史上における左右田の意義については、船山信一による簡潔な要約がある。

(i) 哲学と社会科学、とくに経済学との間に交渉をもたらし、経済哲

学を樹立したこと。

- (ii) 価値のヒエラルキーを否定し、諸文化価値（従つて諸創造者価値）の平等を主張したこと。
- (iii) 西田哲学を批判したこと。
- (iv) 文化主義の立場から社会思想、とくに民主主義、社会民主主義と対決したこと²⁵⁾。

このなかでも、現在までの左右田に対する評価を決定してきたのが (iv) の要素、すなわち「文化主義」である。その「文化」とは何であるのか。左右田の定義を見ておこう。

所謂文化とは自然に対する語である。何等かの意味に於て与へられたる自然の事実を或る一定の規範に照し之を純化し、窮極に於て其の理想とする所を実現せんとする過程の全体を称して吾等は之を文化と呼ぶ²⁶⁾。

つまり左右田にとっての「文化」とは、「自然の事実」の雑多な集積を、ある理想の達成にいたる過程として秩序づけ、整理するための統制的理念である。その具体的内容が真・善・美・貨幣などの「文化価値」であり、その文化価値の実現に向けて努力することを人生の目標とみなす人生観を左右田は「文化主義」と呼んでいる。また、そのような人生観をとることによって初めて、民本主義、国家主義、自由主義といった様々なイデオロギイに対する自分の立場を決定することができる。

惟ふに今吾等が当面の問題とせる一主義を貶して他主義を挙ぐるに当つて、此の如き価値判断をなすに必要なる論理的「アプリアリ」たる規範、当為は、此等の内容が依つて以て上下の階層をなして一義的に一列に配置し得べき様の目標でなければならぬ。……此の如き「アプリアリ」が

立てられ、凡ゆる文化史上の主義は之に照されて価値の判断が行はれ、或は此の如き「アプリアリ」を実現すべき使命を有するものとして、或は之を阻害するものとして、一を採りて他を棄つべしとの根基が適確となることを得るのである²⁷⁾。

文化について「アプリアリ」と書かれているように、それは具体的な内容規定に先立って存在するものであるがゆえに普遍性をもち、全ての人にとっての目標となりうるものであり、その目標にいたる道筋もまた無数にありうる。左右田が軍国主義、官僚主義を批判するのは、まさにこの点においてであり、先に引用した船山の整理にも書かれていたように「諸文化価値の平等」を説く点に文化主義の特徴があった。

このような立場から、左右田は社会主義に対して無特権階級の文化を特権階級の文化の上位に置こうとしていると批判し、特権階級が文化価値の実現に果たす固有の役割を擁護した。このため、マルクス主義の影響下にあった戦後思想において左右田は、船山から「文化的貴族主義、教養あるブルジョアのイデオロギー」²⁸⁾、宇野弘蔵から「実際左右田さんの文化哲学はほくには全くチンプンカンプンだった。労働者の文化がそういうものとは考えられなかったわけだ」²⁹⁾と批判されているように、大正デモクラシー思想の底の浅さ、つまり社会主義に反発しながらその社会主義を乗り越えることのできなかつた理論的水準の低さを表すものとして、否定的に言及されるにとどまってきた。

しかしながら、これらの批判は左右田自ら「一個の人生観」と語る文化主義論のみをとりあげ、『貨幣と価値』や『経済哲学の諸問題』などの経済哲学を含めた全体として左右田哲学が展開されていることを見逃した、一面的な批判であるように思われる。橋本努が言うように「左右田の彼の文化哲学と経済哲学のあいだには、驚くべき論理の一貫性がある」³⁰⁾というだけでなく、むしろ、哲学によって基礎付けられるべき社会科学を、哲学自身によ

って生み出していったというような側面がある。以下に引用する土田杏村の証言は、左右田の晩年の時期に書かれたものであるが、それだけに同時代において左右田哲学がもった影響力の大きさを十分に伝えていると言えるだろう。

左右田の企図以後、それに刺激せられて、これらの諸社会科学の研究に随ふものは、争うてその方法論的基礎をリッカートの哲学に得ようと努めた。そして現今では、さうした方法論的省察を欠くものは、よしいかにその内容に於て勝れた意見を持つにせよ、最早それは通俗的のものとして見られるやうになった³¹⁾。

H. リッカート（一般にはリッケルト）は新カント派哲学の代表的人物であるが、大正期はこの新カント派哲学が、ある種の流行思潮として広範な影響力をもった時代であった³²⁾。その導入に重要な役割を果たしたのが、桑木巖翼と左右田喜一郎である。特に左右田の著作は、社会科学の分野に新カント派哲学が輸入される際の入り口となった。

ここで左右田の哲学が新カント派そのものであるかどうかを問う必要はないだろう。それよりも、当時の社会科学者たちにとって左右田哲学がいかなる意味で新しかったのかを問うことが重要である。この点に関しては、田中希生の著作が示唆的である。

彼らにはひとつのカント的な関心 interest が共有されている。それは、外からやってくる諸々の出来事や経験（表象）に対して、内部に自意識（主体）を打ち立てることであり、どのような経験にもせよ（仮に正反對のものにみえようと）、それらを、そうした自意識……からみた認識あるいは価値の問題に置き換えることである³³⁾。

夏目漱石、桑木巖翼、吉野作造、そして左右田喜一郎。大正期の代表的知識人である彼らは、あらゆる経験を「出来事そのもの」ではなく「精神の産物」とみなす点で一致している。その「精神」が特定集団に共有されれば「文化」「社会」「貨幣」となる。そして「ここでひとつの巨大な反転が生じる——「社会」は、ひとびとの具体的な生活の帰結として実現されるのではなく、生活のほうに貨幣によって媒介され、抽象化されることによって、逆説的に実現されるものとなる。つまり、「社会」が生活を実現するのだ³⁴⁾。左右田哲学は、このような反転の理論を代表するものであった。

とはいえ、左右田がこの「巨大な反転」がどのようにして生じると考えていたのか、彼の論理が十分に明らかになったとは言えない。そこで本章では、左右田が滞独中に著した博士論文『貨幣と価値』を中心に、「社会」に対する左右田の独自の考察を明らかにしたい。

(2) 方法としての社会と文化主義

左右田の著作群が第一に経済学者に向けて書かれたものであることは言うまでもないが、彼にとって現在までの経済学は「その対象が何であるか」を知らないという点で欠陥を抱えたものであった。つまり、経済学の対象についての定義は論者によって様々であるが、誰もその定義を論理的に説明できていない、ということである。雇用労働がなぜ経済学の対象であり、家庭内労働がなぜ対象にならないのか。この点に対する説明を欠いている以上、経済学ははまだ心理主義的経験論を脱していない、と左右田は言う。そこで必要になるのが「先天的形式」としての貨幣である。

心理主義によつて説かれ得る認識の起源其自身によつては此の如き認識の起源あらしむる所以は之を説くことを得ぬ。此の認識を可能ならしむる所以の根本を離れては認識の起源発生に関する経過は厳正に言へば混沌たる経験素材の雑列に過ぎぬ。之を既に一の秩序ある認識発生経過

と見ることを得る為めには、之を導く一箇の先天的形式なかるべからず。此の先天的形式を定めたものがカントの超越哲学である³⁵⁾。

それ自体意味をもたない様々な現象は、この「先天的形式」と関わることによって経済学の対象となる。そして、経済学における「先天的形式」とは貨幣である、というのが左右田の考えである。

これに対しては次のような反論が考えられるだろう。左右田の理論を受け入れた場合、貨幣が歴史的な産物であることは疑い得ない以上、貨幣が存在しない社会や時代は経済学の対象にはならなくなる。また、貨幣といってもその材料や機能は時代によって異なる以上、「日本経済史」のようなものは考えられないのではないかと。

この場合重要なのは、左右田もまた、ある具体的な貨幣概念が古代から現在まで一貫して存在していると考えているわけではない、ということである。『貨幣と価値』において論じられているのは、まさに「先天的形式」としての貨幣であり、歴史上のある時点において存在していた貨幣ではない。では、なぜそのような概念が必要なのか。左右田は次のように説明している。

貨幣が極めて錯雑せる経済状態を経過して始めて貨幣として出現し来れる事、即ち夫は畢竟経済的發展過程の一所産なる事は史上の事実である。併し乍ら系統的説明をなさむとするに当つては、先天的なる這箇の概念を論理上前提する事なくんば、当初より今日の組織に至るまでの發展過程も将又〔ママ〕将来の組織も理論的に説明し得ずと余は安んじて主張し得る。之を換言すれば事実上は發展過程の最終に成立せる概念を論理上前提する事なくんば、全経済の系統的研究は総うじて何等の意味を有せざるに至る³⁶⁾。

左右田もまた貨幣が歴史的産物であることを認めるが、古代において貨幣

は存在しなかった、というだけでは貨幣の成立・変化について何も言うことができないと考える。どういうことか。

『貨幣と価値』の中で左右田は、「評価社会」という概念を導入することによって貨幣の成立を説明している。評価社会とは、あるモノへの個人的な評価が、その個人的な性格を失わないまま集団としての評価を決定することができるような社会である。「而して特定の対象が諸個人に依り、随時評価せらるることの愈々確実なるに従つて、社会……と其の対象との関係は更に密接にして且つ更に確実なるものとなり来る」³⁷⁾。こうして社会内での共通評価を得たものが、やがて貨幣としての機能を持ち始める。以上の点から明らかだが、左右田において、貨幣の成立と社会の成立はイコールで結ばれている。この場合、なぜ個人的な評価行為が集団の評価へと転化するのか、なぜ独立した個人によって評価社会が形成されるのかについて語られなくてはならない。しかし左右田はその困難について積極的に語ろうとはしない。それは語りえない事柄に属するからだ。個人が集まることによって社会が形成されるという事実は、現に社会が存在している、という事実から演繹的にのみ導きだされる。貨幣の成立についても同様であり、現に貨幣が流通しているという事実から、過去の単純交換に意味が与えられているに過ぎないのである。

確かに左右田は『貨幣と価値』のなかで帰納的に（ということは過去から現在という順番で）貨幣の成立を語っているが、それが見せかけにすぎないことは次の一節からも明らかだろう。

全体の概念（評価社会）が這般の関係をよく意識する部分（評価個人）の間より自ら展開すとの結論に達する為には、全体概念は（一）部分たる概念の論理的先行なると同時に又（二）後者の相関概念なる事を要する。然らざれば評価個人の単なる多数以外に何物をも考ふる事を要せずとの説に対して何等積極的の言説をなし得ない。……斯くて這箇の関係

を明かに意識せる評価個人は其の相互の關係に無關心ならざる限り……
彼等の間に全体たる評価社会の概念を獲得すと結論し得る³⁸⁾。

左右田にとって貨幣の成立と評価社会の成立はほぼ同じ出来事を意味しているのだが、ここではその評価社会が左右田の定義通りであることを「要する」ものとして使われていることに注目したい。つまり、個別的な事実、経験の集合から帰納的に評価社会の生成を語ることが不可能であることに對し、左右田は十分に自覺的なのである。しかし「社会は存在しない」などと左右田は言わない。何らかの価値が共有された社会（評価社会）が存在しなければ、経済システムもまた存在しえないからだ。「社会はある」と断言しなければならない。この断定と論理との間に広がる溝は、どのようにして架橋されるのだろうか。おそらくここに左右田貨幣論を理解する上での急所が存在している。

左右田は次のように論じている。社会と個人とは、ある面において対立するが、別の面においては相互に補完するものである。故に「個人其のものの中に充全の意義を見る事なくして、人間の集団に何等か社会科学的意味を附与せむとするは、単なる論理上の矛盾である」³⁹⁾。ここで左右田が述べていることは、一見複雑だが、実は単純である。例えば「美」という価値を例にして考えてみよう。この世界に「美」が存在することは、おそらく誰も否定しないだろう。しかし「美とは何か」という問いに答えようとする、美術品のような美しい品物を指し示すしかない。では、なぜその美術品は美しいのかと更に問われたら、どう答えればよいのだろうか。人間があらかじめ「美」という概念を持っているから、それが美しいとわかるのだ、と答えるしかないのではないか。このことを一般化して述べると、価値は価値判断によって構成されているが、価値判断は価値の存在を前提としている。しかし、その価値はポジティブに記述することのできない、指示対象を欠いた記号のようなものである⁴⁰⁾。

社会という全体性を生み出すのは、この実質を欠いた「価値」概念に他ならない。個々の価値判断は、価値という概念があるからこそ可能であるのと同時に、価値を具体化することでもある。価値判断が行われる以上、自覚の有無を問わずその具体化の過程に関係せざるをえない。しかし、具体化された価値は価値そのものではない。価値は存在に対する「極限概念」である、と言われるのはこのためである。

さて、『貨幣と価値』は『第一部 批判篇』と『第二部 主張篇』に分かれているが、左右田自身の主張が表される第二部の冒頭では「十八世紀の傾向は人間行為の全部を個人に還元せむとし、十九世紀の傾向は個人の意義を其の之が背景の中に埋没せしめ、それを社会概念に従属せしめむとするものであり、共に正当なる学問的見地を語る所以ではない」⁴¹⁾と、社会を個人の単なる集合と見る契約説的な見方と、社会の一体性を保証する意思を想定する有機体説的な見方の両方が批判されている。そして「凡そ人間行為を考察する場合には社会科学の出発点及び根本概念として先づ「個人」及び「社会」の概念を規定し、其の意義を決定せねばならぬ。而して此の課題は又同時に経済学の出発点をなすものと余は考へる」⁴²⁾と、社会概念を規定する重要性が強調されるとともに、それが経済学だけでなく社会科学全般の出発点でもあることが明確に書かれている。このことから、左右田が黎明会へと参加し、上記の理論を「文化主義」として一般化するに至るのは必然であったと言えるだろう。

このとき、左右田は現実の社会をどのように見ていたのだろうか。1920年に彼は横浜社会館の館長、その翌年には横浜社会問題研究所の所長に就任し、社会問題に関するいくつかのテキストを残している。そこでの基本的な認識は「貨幣によつて凡ての社会生活は数量化せられ、平準化せられ、デモクラチックなり得た」⁴³⁾ということであり、貧富の差もある意味では貨幣の数量の差でしかない、ということである。慈善・救済事業とは異なり、現代の社会事業は相手の人格を尊重する「人格主義」に基づかねばならない、という

主張もここから導かれる⁴⁴⁾。しかし、問題はむしろ、数量化された個人が集まることで、個人の意図には還元されない社会現象が生じることだ。このような「数量の性質化」⁴⁵⁾の具体例として、左右田は労働者のストライキ、資本の増殖現象、普通選挙などを挙げている。これらの現象は「群集心理といふ如き脆弱な理論」では解釈できないものであり、「性質の数量化に対して殆ど最後の且つ最も完備したる解釈を与へたカントの哲学も二十世紀の文化哲学を必ずしも当然の結論として解明し得るものではない」と述べている⁴⁶⁾。

個人の意図の総和とそれによって構成される社会現象とは一致しない、という基本的な認識は一貫しているが、一方で微妙な問題関心の変化を見ることは可能だろう。個人（交換）と社会（貨幣）の乖離に対し、後者から前者を演繹的に位置づけることで説明していた『貨幣と価値』に対し、「文化主義」を唱えるこの時期の左右田は、前者から後者を帰納的に導き出すことの困難さに正面から取り組もうとしているように見える。とはいえ、そこで用いられる論理は『貨幣と価値』の応用とでも言うべきものだ。すなわち、「論理的先行」として個人の外部に置かれていた全体概念を、個人的行為に内在するものとして位置づけ直す、というものである。文化主義の特徴については先述したのでくり返さないが、この変更により、左右田における全体概念の形式性と、全体概念が同時に個人的なものでもあるという逆説的な性質とが、一層明瞭になったように思われるので、その点に触れておきたい。

左右田の文化主義において重要な点は、「一切の人格は、文化の生産、創造にたづさはることによつて其自らの重要と価値とを發揚するに於て其自身固有の意義が見出し得らる」⁴⁷⁾という様に行為内在全体性としての「文化」の重要性と共に、その所産である「文化財」との区別が強調されている点であろう⁴⁸⁾。「文化財」の方がむしろ日常的な語彙としての「文化」が表す意味に近く、日本文化やプロレタリア文化は「文化財」に属する。よって「文化の生産にたづさはる」ことは必ずしも「日本文化」の存在を意識し、その発展に努めることを意味しているわけではないのである。左右田のいう「文

化」とは、個々人による雑多な現象を「文化財」の生成へと結びつけるための統制的理念であり、具体的な内容を持たず、仮に内容を持ったとすればその瞬間に処理規則としての機能を失うだろう。このような「文化」を紐帯とした社会を、左右田は「協同体社会」と呼んでいる⁴⁹⁾。

むしろ、左右田は全ての社会が協同体社会であると考えているわけではない。むしろ、統制的理念であるはずの「文化」が固有の内容を持つことによって（人々が「日本文化」の発展を強制されることによって）、日本社会は未だ協同体 Gemeinschaft の段階に留まっていると左右田は考えていた⁵⁰⁾。自身の理論を文化「主義」として提唱したのはまさにこのためであるが、先述したように労働、経済、政治など諸領域における「数量の性質化」すなわち「社会」や「文化」といった統制的理念を媒介とした社会現象を重視していたこともまた事実であり、左右田はこれらの社会現象に「協同体社会」の萌芽を見ていたのではないかと考えられるのである。

第3章 福田徳三における解釈としての社会政策

(1) アプリオリ論争

左右田哲学は個と全体の関係、社会現象を解釈する上での複雑性を著しく縮減する図式性の強さ、理論的一貫性のゆえに、その後の社会科学に対して多大な影響を残すことになった。その要諦をまとめると以下ようになる。個の集合によって生じる社会現象を、個の側から帰納的に解釈するのは不可能であり、まず全体性（社会）を指定した上で、演繹的に個と全体の関係について考えるべきである。ただし、その全体性が個々人の共通性に支えられているわけではない。むしろそれは、純粋な否定性、何ものでもない何かによって構造化された、社会という言葉によってしか表せないものである。

このように社会の無内容性を主張する左右田に対し、社会政策学の立場からこれとの批判的応答を試みたのが、左右田の東京高等商業学校在学時の指

導教授の福田徳三であった。

「わが国ノン・マルクス経済学の祖」と呼ばれる福田徳三については⁵¹⁾、既に多くの先行研究が存在しているので、改めて紹介的な文章を書く必要はないだろう。また、経済学史に対してそれほど強い関心を持たない筆者としては、彼が日本の経済学に与えた影響について言及するつもりもない。本節で取り上げるのは、左右田との論争の中で現れた「社会」科学者としての福田であり、その意味ではきわめて狭い視角から彼に言及するわけだが、その点あらかじめご了承いただきたい。

さて、福田と左右田の論争については研究史のなかで何度か言及されているが、その対立点と共通点については正しく理解されてこなかったように思われる。それにはむろん理由がある。第一に福田は当初、左右田との論争を回避しようとしていた。左右田による経済学批判に対し、福田は「〔左右田〕学士の立場より見れば予が説は現時通行の Psychologismus に囚はるゝことは学士の説の Logismus (仮に造語す) に於けるが如くなる可きは勿論にして学士と予と幾葛藤を打出するも到底同一の立場に会す可き見込みあるものにあらざるは明なり」と答え⁵²⁾、両者の立場があまりに隔たっているため議論は無意味であると主張している。第二に、研究史における「福田は演説家として聴衆を惹きつけたかもしれないが、必ずしも論争の巧者ではなかった」という評価が関係している⁵³⁾。福田はその研究歴のなかで、吉野作造、河上肇をはじめ数多くの研究者と論争を行っているが、その中には用語法や引用の出典といった些末にも思える問題へと議論が拡散した場合も少なくない。左右田との論争についても、福田自身の主張を披露するというよりは左右田のカント理解を批判するという態度が前面に出ており、一見すると福田の思想を理解する上ではあまり重要ではないように見えるのである。

しかし、それにも関わらず、左右田による批判を福田がきわめて重要視し、内在的な反批判を試みたことも確かなように思われる。

私が大学に入つてはじめて福田先生の経済原論講義を聞いたのは昭和四年でしたが、そのときは既に左右田先生は亡くなられたあとでした。そのときの講義の劈頭に福田先生は次のように云われました。諸君、経済学を学ばんと欲すればカント哲学を学ぶにしかず……そういう点でどうも福田先生は左右田さんが亡くなつたら、急に諸君はカント哲学をやらなければいかぬということを学生に激励されたような形になつて、先生一流のあまのじゃく的なところを示されたと思うのであります⁵⁴⁾。

一応補足しておく、左右田批判を主な内容とする福田のテキストはいずれも左右田の存命中に書かれており、左右田が亡くなってから福田がカント哲学を学び始めたわけではない。福田による左右田批判が単なる「批判のための批判」でなく、彼自身の思想形成に重大な影響を与えたことが、先の引用文からも読み取ることができるだろう。

まずは批判の要点をまとめておこう。第一に、形式科学と経験科学の差異について。カントは確かに形式科学（具体的には数学）における先天的形式の存在を証明したが、しかし、カントの理論は果たして経験科学（具体的には経済学）にも当てはまるのか。左右田はその点を論証していない、というものである⁵⁵⁾。これも重要な内容を含んでいるが、次の批判がより根本的である。左右田において「先天的概念」（アプリアリ）とは、「価値」や「文化」がそうであるように、具体的な内容規定を欠くが故に、どのような雑多な内容であっても整序する統制的概念として位置づけられていた。しかし、相対性理論を通過した我々はもはや、このような「永久妥当なるアプリアリ」の存在を信じることは出来ない。相対性理論がエーテルを駆逐したように、内容が不明であるにも関わらずその存在だけが前提とされる「先天的概念」もまた否定されるべきではないか⁵⁶⁾。大意としてはこのような批判である⁵⁷⁾。

これは一見すると左右田哲学の全否定であるように見えるが、そうではない。ここで争われているのは、先天的概念の有無ではなく、その先天的概念

が左右田の言うように無内容な統制的理念であるのか、それともポジティブな内容を持っているのか、という点であった。実際、先の批判に対して物理学者・石原純から疑義が示されたのに対し、福田は次のように弁明している。

私の言はんとする所は、カント哲学に於けるアприオリ命題、殊に左右田博士等の主張せらるゝ何等の内容的制約を許さない先天的条件、規範、絶対普遍妥当的形式としてのゾレンと云ふ意味にてのアприオリからの解放と云ふ一事であつた。我々の思索から、一切アприオリを排斥するなど云ふことの考へ得可きでないことは、私は事余りに当然なりと考へて別に何とも言はなかつたのである⁵⁸⁾。

先にも述べたように福田が「必ずしも論争の巧者ではなかつた」以上、この弁明だけで彼の真意を測ることはできない。よって、我々はさらに2つの方向から検討を進めていきたい。ひとつは福田の社会概念が左右田のそれとどのように異なっているかについてであり、もうひとつは福田の用語法についてである。

社会は人ありて存し人は生存の資料を得て活く、生存の資料を社会以外に求むることは問題以外として、社会の内において之を求るは生れたる限りの人に共通の要求なり。……経済学にはマルサスの自然法則ありて、生まるゝもの必ず活くるものならざることを教ふ。是は一の自然事実なり。社会あり文化ありて存する生存権の要求は、此自然事実を打消すこと能はず。這箇の一大自然法則の下に於て文化法則として立つもの、即ち生存権の要求なり。詳しく云へば、生存権の要求は生者必存の保障にあらず、生者生存要求の認証なり。社会が一の文化価値として一の『ア・プリオリ』として此の認承を受取ることなり⁵⁹⁾。

現在、福田は日本における生存権論の先駆者として知られているが、彼がその議論に「文化価値」という左右田を連想させる用語を用いたのはなぜだったのか。この問題は、実は福田の「社会」概念の独自性と密接な関係を持っている。以上の問題を通して、大正期に大きく転換を遂げた「社会」が、その内部にいかなる対立軸を抱えていたのかを明らかにしたい。

（2）社会と生存権

福田にとって「社会」とは何か、という問題から検討を始めよう。それはまず、経済規模の拡大によって発見されたものである。「経済学が先づ経済生活の上に於て『社会』と云ふ大きな或もの、の一端（社会階級と流通社会とを主として）を捉へて、茲に汝等が従来心附かなかつた重大な現象が存するぞと教へ出した」のであり⁶⁰、この点に関しては左右田とほぼ同じ発想を有している。貨幣の働きによってあらゆる事柄が数量化されると同時に、数量がその総和を超えた意味を持ち始めたのである。では「重大な現象」とは何か。人格性と非人格性の争い、というのが答えであるが、福田が「社会の発見」について最も明快に語っている「社会政策序論」⁶¹を中心に、より詳しくみてみよう。

福田にとって社会とは、「人格性と非人格性との戦闘」が行われる舞台であり、現代においては国民経済の範囲と一致する。非人格性とは、端的に言って雇用労働のことであり、その原因でもある資本の蓄積、さらに遡って国家による資本制の擁護まで含まれている。雇用労働は労働者を「他人のために働かせる」ため、労働者はそれに反発して労働運動を起こす。この労働運動こそが人格性の回復運動を代表するものであり、それはまた「社会的」現象とも呼ばれる。

人格性の回復運動は、その矛先を非人格性の根本にある国家へと向けるだろう。ここからマルクス主義への距離はわずかだが、それに対して批判的な福田は、アナキズム的な状況が到来する前に国家は社会政策を実施し、労

働運動を慰撫すると考える。このことは既存の労資関係を変化させると共に、それが決して完全な解決（労働運動の撲滅ないし資本の解体）でもないことから、次の「人格性と非人格性との戦闘」を準備することにもなる。この終わりのない戦いこそが「社会」なのだ。

社会運動は社会のうちに存して国家外圏に肉薄し、其外圏を部分的に、若くは全体的に打破らんとする力なりと解せられるのである。然し実際は、其打破の勢力たるよりも、国家外圏の外側から其内側に入り込まうとする滲入（インゾスモス）運動である。……国家外圏は之に応じて段々拡張せられてきた。然し其れは内部の運動の要求に一致する程度には至らぬ。ソコデ力の弱い闘争は国家外圏を通ずる滲出（エキゾスモス）運動となる。……社会の発見とは即ち滲出入運動の全体の発見である⁶²⁾。

抽象度の高い文章だが、福田が「社会」を労働運動と社会政策が交互に生じる「運動」として捉えていることだけ理解してもらえればよい。問題はしかし、なぜそのような運動が生じるのかである。

福田はこの「社会政策序論」のなかで奇妙な文章を書いている。「我々が為し得ることは社会問題を解釈することである、解決すると云ふことは容易に言ひ得ることではない」⁶³⁾。これは一見すると学者の無力を吐露した文章のように思われるが、そうではない。この「我々」の中には社会政策も含まれているからだ。

故に我々に取つては、社会政策其ものが最重要であるのではない、解釈の試として重要なりと言ふに過ぎない。其解釈をして意義あらしめ、此れに存在を許す重要な主体は、社会運動其ものである、発見せられた『社会』の向後の進展是れである⁶⁴⁾。

社会政策とは社会の解釈である、という福田の主張は一見すると倒錯的だが、先の問題について考える上で決定的に重要である。なぜならば、福田が「社会政策の哲学」の中心に据える「生存権」もまた、この倒錯を共有しているからだ。

福田が生存権（正確には生存権の認承）を「文化価値」すなわちアプリオリなものとして定義したことは先述した通りである。「社会政策序論」の中ではより具体的に「生存権の認承は権力〔国〕家をして義務国家たらしめる所以である。……其義務の第一は国民の生存権を認承し、之を確保することである」と書かれているが⁶⁵⁾、ここで「生存権の認承」は「義務国家」を挟んで2つの役割を同時に担っている。つまり義務国家の基礎であると同時に義務国家の目的でもあるのだ。この両義性は先行研究でもすでに指摘されているが、そこでは「論理的飛躍」が指摘されると共に、その実際的効果が強調されてきた⁶⁶⁾。しかし、それが論理的飛躍にみえるのは社会と社会学者とを切り離して考えているからにすぎない、ということを経験者の福田のテキストから論証しよう。

福田は統計学に対して継続的な関心を持ち、それを生存民勢学、経済民勢学、社会民勢学の3つに分類しているのだが、その中でも経済民勢学は「今日の社会に於ける一切の人に其の根基を供し、其れに一の社会色（ソーシャル・カラー）を与へるものである」と述べていることは注目に値する⁶⁷⁾。ただ明らかにするのではなく、「与へる」と書かれているのはなぜか。統計を取ることは与えられた対象を受動的に処理するだけではなく、現実介入的な意味を持つから、である。そうであるからこそ、福田は統計学を医師、国民を病人に例え、国民は自分たちの病気も必要な薬も知らないからこそ統計学が必要なのだ、と説いたのであった⁶⁸⁾。

左右田との論争の中で、福田は従来の経済学が「欲望」という経験的对象を根拠とした「心理主義的経験論」であるという批判に対し、次のように答

えている。

従来の経済学が欲望論を以て出立点とすることの必ずしも妥当ならざることとは予も今に於て之を認む。然れども経済学の欲望論は畢竟経済行為論の一部たるに外ならず、之を一概に心理主義なりとして斥けんとすることは必ずしも妥当ならず。而して伝来の哲学も亦此点に於て分つ所なきなり。再び例をカントに取らんか、彼は前に引く如く『世界に於て制限なく善しと認め得べきものは善き意思の外にあることなし』と云へり。然れども善き行為を産み出さざる善き意思ほど、社会に於て無用なるものはなきにあらざや。カントの謂ふ善き意思は文化価値にあらざ、之を善し悪しとする文化価値は社会に於ける善き行為（現権力関係に順応する行為）なり、論者〔左右田〕は経済学の心理主義を責むるに先ち、カントの心理主義（かく名くるを得とせば）を難ず可きならざるか。

批判の当否はともかく、福田がここで解釈と行為との一体性を主張していることだけ確認しておこう。左右田において文化価値とは統制的理念であり、それ自体は内容を有していなかった。福田が批判するのはまさにこの点であり、文化価値が現在の社会的事実から導き出されたものである以上、それは必ず固有の内容を持つというのである。言い換えるなら、左右田が帰納的な方法からでは問いがたい現象に対して「社会」や「文化」といった名前をつけることで問いを停止したのに対し、福田もまた帰納的方法に対する限界意識を共有しているものの、名前をつけることで生じる内容（生存権認承の要求）を積極的に引き受け、その可能性を引き出すことを通して社会改良を行おうとしたのである。

むしろ、福田が主観的に「社会」を意味づけていると述べているわけではない。福田にとっては、「非人格性と人格性の戦闘」も「生存権認承の要求」も「社会色」も、客観的に存在しているものである。それは主に歴史研究に

よって裏付けられる。

我日本に於ては殊に徳川時代に於ては斯民皆其業を守り、兎に角生活の保障は与へられてあつた。……今日の新しいデモクラシーは更らにより進んだ形に於て、此の昔あつた生活の安固を更により完全により徹底的により高き意味に於て与へんとするものである、其でなければデモクラシーとはならぬ⁶⁹⁾。

生存権は可能性として存在している。しかし、それは社会学者によって観察され、現実社会の「解釈」に用いられることで、初めて現実的なものとなるのだ⁷⁰⁾。

おわりに

以上われわれは明治末期から大正期における社会変動を背景とした「社会」概念の機能的変化について検討を行ってきた。最後に、これまでの内容を前提として、(1) この時期における「社会」概念変化の全体的な傾向、(2) その変化を積極的に推し進めた左右田喜一郎、福田徳三の間での対立点を整理した上で、(3) 昭和期の「社会」概念について若干の展望を加えておこう。

(1) 明治期において「社会」とは多義的な言葉である一方、経験的な対象と強固に結びついた言葉でもあった。すなわち、社会はその構成員の総和とほぼ一致していた。しかし、明治後期に始まる社会問題の増大、労働運動の激化といった現象は、社会をひとつのシステム(社会的現象)として見る思考を促した。それは社会有機体説とも異なり、自由な個人によって構成されながら、同時に全体としての性質を持つものであった。

この社会的現象を解釈するための語句は、既存の語句を再利用する形で準備された。「社会」「貨幣」「文化」などがそれにあたるが、これらの語句は

ある共通した機能を有している。多義的か一義的かという問題を無効化することによって、その言葉を中心に多様な現実の配置を定める、という機能である。それは与えられた現実を受動的に解釈するだけでなく、「どのような社会に我々が住んでいるか」という社会像にまで影響を与えたと考えられる。

(2) 左右田哲学とはこのような社会概念によって社会科学の基礎づけを図るものであった。左右田は社会現象の帰納的解釈は不可能であるという認識に基づき、全体概念を論理的の先行と見なすことで演繹的に解釈することが可能になると考えた。全体概念として「社会」や「貨幣」、「文化」が挙げられるが、これらは現実の「日本社会」とも「円」とも「文化」とも一致しないという抽象的概念であり、まさにそのことによって幅広い対象を扱える、と左右田は考えた。実際、その図式性ゆえに以後の社会学者へ強い影響を与えている。

これに対して福田徳三は、社会現象をアприオリな全体概念から演繹的に把握するという関心を左右田と共有しながらも、その全体概念が永久妥当的なものとしてある、という左右田哲学の形式性を批判した。たとえ全体概念が永久妥当的であるといったところで、それが現実の社会秩序を背景にしている以上、現実肯定か現実否認かのいずれかに傾いていく。福田にとって社会のアприオリ性とはそのようなものではなく、常にありながら未だない、解釈行為に重点を置く概念であった。この立場からは、現実の社会と「社会」概念との食い違いは、社会科学自身の問題として認識されることになる。

(3) 現実を分析するための形式として「社会」を考察した左右田と、「社会の現実性」を重視した福田。この両極端な立場の間には、おそらく無数の「社会」学者がいただろう。彼らは左右田的な関心——あくまで現実の社会とは別のもので「社会」概念を用いる——を共有しつつ、福田的な関心——「社会」はその出自と背景、内容を有する——もまた共有していた。

しばしば指摘されるように、満州事変以降「社会」概念は「階級対立の事実を前提」とするものであり⁷¹⁾、「階級対立の歴史観などは最も非国民的な

ものである」⁷²⁾ という理由から、再び否定的な意味を持つようになる。その原因を時代状況と関係させて論じると共に、小論の強調した「社会」概念の内部的対立に注目しつつその帰趨を検討すること、これが筆者に残された課題である。

註

- 1) 飯田泰三「吉野作造—ナショナルデモクラットと「社会の発見」」1980年（『批判精神の航跡』筑摩書房、1997年）。
- 2) 代表的なものとして、以下のものを挙げる。有馬学『「国際化」の中の帝国日本』中央公論新社、1999年、上野成利「群体としての社会—丘浅次郎における「社会」の発見をめぐる」阪上孝編『変異するダーヴィニズム—進化論と社会』京都大学学術出版会、2003年、酒井哲也「国際関係論と「忘れられた社会主義」—大正期日本における社会概念の析出状況とその遺産」『思想』945号、2003年、米谷匡史「矢内原忠雄の〈植民・社会政策〉論—植民地帝国日本における「社会」統治の問題」『思想』945号、2003年、川島章平「福田徳三における「社会の発見」と個人の生」『相関社会科学』15号、2005年、織田健志「共同性の探求—長谷川如是閑における「社会」概念の析出」『同志社法学』59巻2号、2007年。
- 3) 例えば武藤秀太郎は福田徳三における「社会の発見」を取り上げ、以下のように述べている。「一九二〇年前後は、福田に限らず「発見」された社会の理論化や、「人格」の成長が唱えられ、有機体的国家観をとっていた吉野作造にも、「国家」より「社会」に重きを置く転回が起こったといわれている。ただ、当時「人格主義」を標榜した阿部次郎は、福田と異なり「国家」を「社会」の一部ととらえるなど、「国家」「社会」「人格」といった概念の定義は、各論者によってまちまちであった」（武藤秀太郎「異端の大正デモクラシー—福田徳三と吉野作造」『近代日本の社会科学と東アジア』藤原書店、2009年、123頁）。
- 4) 左右田喜一郎を扱った代表的な研究として以下のものを挙げておく。船山信一『日本の観念論者』1956年（『船山信一著作集』第8巻、こぶし書房、1998年）、左右田博士五十年忌記念会編『左右田哲学への回想』創文社、1975年、塩野谷祐一『経済と倫理』東京大学出版会、2002年、橋本努「左右田喜一郎—真・善・美にならぶ貨幣」鈴木信雄編『日本の経済思想二』日本経済評論社、2006年。
- 5) 清水太郎「カント学派哲学と大正期日本の哲学—西田幾多郎と左右田喜一郎」『現代思想』22巻4号、1994年、216頁。
- 6) 橋本努「左右田喜一郎の貨幣と理性—若き知性と晩年の思索についての補論—」『経済学研究』56巻2号、2006年、147頁。
- 7) 橋本前掲「左右田喜一郎の貨幣と理性」149頁。

- 8) 石田雄『日本の社会科学』東京大学出版会、1984年、47頁
- 9) 石田前掲『日本の社会科学』47頁。
- 10) 山田博光「社会小説論」『日本近代文学』第7号、1967年。
- 11) 飛鳥井雅道によると「社会小説の提唱者・宮崎湖処子……は、社会問題研究所のメンバーであったし、内田魯庵は横山源之助の友人で片山潜の『労働世界』に小説を書いていた（飛鳥井雅道「明治三〇年代社会小説」1959年（『近代文化と社会主義』晶文社、1970年、11頁）。
- 12) 山田前掲、29頁。
- 13) 飛鳥井前掲、46頁。
- 14) 金子筑水「所謂社会小説」1898年（『明治文学全集』第50巻、筑摩書房、1974年、10頁）。
- 15) 金子前掲「所謂社会小説」11頁。
- 16) 江藤淳「リアリズムの源流—写生文と他者の問題」1971年（『リアリズムの源流』河出書房新社、1989年、37頁）。
- 17) 高橋敏夫「『武蔵野』、又は「社会」の発見」自精堂編集部編『日本文学史を読むⅣ 近代2』有精堂出版、1993年、220頁。
- 18) 江藤前掲「リアリズムの源流」37頁。
- 19) すでに市村弘正が指摘していることだが、『東京風俗誌』のような本においてさえ、「社会の組織及び其状態」、特に「極貧極富の懸隔甚だし」いことが注目されえたのである（平出鑑二郎『東京風俗誌』1899年（八坂書房、1991年）。
- 20) 海野幸徳『輓近の社会事業』内外出版、1924年、149頁。
- 21) 「『社会事業』改称改題の辞」『社会事業』5巻1号、1921年、2頁。
- 22) 田子一民『社会事業』1922年（『戦前期社会事業基本文献集』第26巻、日本図書センター、1996年、24～25頁）。
- 23) 茗荷房吉「社会の本質及び概念」社会思想社編『社会科学大辞典』1930年（『社会科学資料事典』日本図書センター、2004年、494頁）。
- 24) 左右田の略歴については、南亮三郎「左右田博士とその業績」『商学研究』第2巻2号、1927年、などに依拠している。
- 25) 船山前掲『日本の観念論者』195～196頁。
- 26) 左右田喜一郎『『文化主義』の論理』1919年（『左右田喜一郎全集』第4巻、岩波書店、1930年、9頁）。
- 27) 左右田前掲『『文化主義』の論理』7～8頁。
- 28) 船山前掲『日本の観念論者』212～213頁。
- 29) 宇野弘蔵『資本論五十年』上巻、法政大学出版局、1970年、114頁。
- 30) 橋本前掲「左右田喜一郎—真・善・美にならぶ貨幣」436頁。
- 31) 土田杏村『日本支那現代思想研究』1926年（『土田杏村全集』第4巻、日本図書センター、1982年、145頁）。
- 32) 新カント学派については「特集＝新カント派」『理想』643号、1989年、および大橋容

- 一郎「新カント学派」須藤訓任編『哲学の歴史』第9巻、中央公論新社、2007年を参照。
- 33) 田中希生『精神の歴史』有志舎、229頁。
 - 34) 田中前掲『精神の歴史』233頁。
 - 35) 左右田喜一郎「カント認識論と純理経済学」1915年（『左右田喜一郎全集』第3巻、岩波書店、1930年、265頁）。
 - 36) 左右田喜一郎『貨幣と価値』1909年（川村豊郎訳、『左右田喜一郎全集』第2巻、岩波書店、1930年、416頁）。
 - 37) 左右田前掲『貨幣と価値』315頁。
 - 38) 左右田前掲『貨幣と価値』351頁。
 - 39) 左右田前掲『貨幣と価値』279頁。
 - 40) この価値論は「極限概念としての文化価値」論文（1918年）において、時間性を組み込んだ価値の発展理論として形式化されることになるが、ここでは触れない。
 - 41) 左右田前掲『貨幣と価値』234頁。
 - 42) 左右田前掲『貨幣と精神』234頁。
 - 43) 左右田喜一郎「都市生活と思想問題」1920年（『左右田喜一郎全集』第3巻、596頁）。
 - 44) 左右田喜一郎「横浜社会館開館式に際して」1920年（『左右田喜一郎全集』第3巻、603頁）。
 - 45) 左右田喜一郎「superadditum」1926年（『左右田喜一郎全集』第4巻、493頁）。
 - 46) 左右田前掲「superadditum」493頁。
 - 47) 左右田前掲「文化主義の論理」10頁。
 - 48) 左右田前掲「文化主義の論理」9～10頁。
 - 49) 左右田喜一郎「文化哲学より観たる社会主義の協同体倫理」1925年（『左右田喜一郎全集』第4巻、461～462頁）。
 - 50) 左右田前掲「文化哲学より観たる社会主義の協同体倫理」490頁。
 - 51) 上久保三『日本の経済学を築いた五十人』日本評論社、2003年、10頁。
 - 52) 福田徳三「左右田学士に答ふ」1915年（『左右田喜一郎全集』第3巻、291頁）。
 - 53) 木嶋久実「福田徳三—ある大正自由主義者の形成」大森郁夫編『日本の経済思想1』、日本経済評論社、2006年、112頁。
 - 54) 「一橋経済学の七十五年」『一橋論叢』24巻3号、1950年、374頁。
 - 55) 福田徳三「カント国家及法律哲学管見」1917年（『経済学全集』第5巻、同文館、1926年）。
 - 56) 福田徳三「行き詰れる世界とその展開」1920年（『経済学全集』第6巻、同文館、1926年）。
 - 57) 相対性理論が福田に与えた影響については金子務『アインシュタイン・ショックⅡ』河出書房新社、1981年。
 - 58) 福田徳三「行き詰れる世界とその展開 附考」1922年（『経済学全集』第6巻、1444

～1445頁)。

- 59) 福田徳三「生存権の社会政策」1916年(『経済学全集』第5巻、2105～2106頁)。
- 60) 福田徳三『流通経済講話』大鏡閣、1925年、133頁。
- 61) 福田徳三「社会政策序論」1922年(『経済学全集』第5巻)。
- 62) 福田前掲「社会政策序論」117～118頁。
- 63) 福田前掲「社会政策序論」30頁。
- 64) 福田前掲「社会政策序論」30～31頁。
- 65) 福田前掲「社会政策序論」126頁。
- 66) 宮島英明「近代日本における“社会政策的自由主義”の展開—福田徳三の「生存権論」の史的分析」『史学雑誌』92巻12号、1983年、60～61頁。
- 67) 福田徳三「エコノミック・デモグラフィーより見たる震災前の東京市」1923年(『経済学全集』第2巻、同文社、1925年、2043～2044頁)。
- 68) 福田徳三「統計経済講話(其三)」1919年(『経済学全集』第2巻、1567～1577頁)。
- 69) 福田徳三「新しい意味のデモクラシー」1917年(『経済学全集』第6巻、764頁)。
- 70) 解釈することが治療であるという点で精神分析的だが、「生存権の社会政策」の発展系として「解放の社会政策」されるなど(福田徳三「解放の社会政策」1919年『経済学全集』第6巻、1255頁)、大正期における福田の文章にはしばしば無意識に関連する用語が表れる。
- 71) 松澤兼人「厚生事業と社会事業」(『社会事業研究』1938年5月号、100頁)。
- 72) 松澤前掲「厚生事業と社会事業」103頁。